

今年も合同記念礼拝の朝を迎えました。敬愛する先生方、兄弟姉妹の写真を前にすると、懐かしさが込み上げてきます。そして、しっかり生きなければと、襟を正される思いもします。その向こうに、天国の光が輝き、イエス様がおられる平安を感じます。

美しいとき

この世界は、あらゆるものが変化していきます。むしろ、移り変わることこそ、真実であるといえるでしょう。永遠に変わらない神の言葉、聖書も、実は時代に合わせて変化します。この教会も、以前は「口語訳」を用いており、それ以前は「文語訳」でした。何十年後には、それも変わっていくでしょう。慣れ親しんだものが、変わっていくことは、私たちにとって、不快であったり、がっかりしたりするものです。しかし、真実に近づく道は、あれかこれかではなく、その間にあるものです。それは、私という存在が、偉大な世界の大きさを理解するには、あまりに小さいからです。

今朝の箇所は、「神はすべてを事宜に適うように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる」と翻訳されていますが、以前の口語訳では、「神のなされることは皆その時にかなって美しい」となっていました。私たち夫婦にとっては、結婚式の返礼品のお盆に刻んだ、思い出の聖句で、いつも、そのことを懐かしく思い出します。

二つの聖書の間、気付かされることは、ここで言われている「美しさ」とは、「神様の御心に適っている姿」であるということです。この美しさは、生まれる時や植える時、笑う時や踊る時だけでなく、嘆きや涙の時、それに黙する時、そして殺す時や、戦いの時、死の時にさえも、そこに存在すると語られているのです。

私たちの後悔や無念さが、胸を打つとき、それは自分の小ささや限界を、思い知らされるからではないでしょうか。次の世代に、迷惑をかけたと思うその瞬間でさえも、神の御心に適っているなら、そこにかけがえのない美しさがまたたくと語られています。あなたのおかげです、という感謝の言葉や、残された人たちの新しい活躍が、ここから始まるという確信。涙の中にも、大きな神様のご計画は働いています。

永遠を思う心

本日納骨される、花本環爾兄、奥田茂子姉、そして末岡賀子姉は、それぞれこの教会に、古いつながりと、深い関わりのある方々です。印象深い、あのとき・このときの情景が思い出されます。先人は「さきのこと」を、未来ではなく過去のことを指して言いました。「永遠を思う心」も、見たことのない別世界の想像ではなく、記憶の彼方に続く、実に長い年月を指していると言われます。私たちの人生を、同じだけ繰り返し思い出すには時間が足りない事も事実です。そう思うとき、なんと私たちの存在は、不思議な運命の中に置かれていることでしょう。この広い宇宙の、銀河系の、地球という星の中で、神様は、私たちが御心に適うことを願って、生かしておられるのです。